

## アブラハムの生涯における

# 「レフ・レハー」(לֵךְ־לְהָרָה)の意義

### ベレーシート

●今回の「ヘブル・ミドゥラーシュ例会」では、神がアブラハムに命じた「レフ・レハー」(「あなたは行け、あなたは旅立ちなさい」)の意義について、神の永遠のご計画の視点からその意味するところを考察したいと思います。アブラハムの生涯において神が命じた「レフ・レハー」(לֵךְ־לְהָרָה)のフレーズは、創世記 12 章 1 節と 22 章 2 節の二回です。最初はアブラハムの召命の時であり、もう一つはアブラハムにとって信仰の最大の試練となる時に語られています。このアブラハムに対する「レフ・レハー」は、神のご計画における永遠の御国の究極のヴィジョンを指し示す象徴的なフレーズだと考えます。アブラハムの生涯は、まさにこの二つの「レフ・レハー」に囲まれていると言っても過言ではありません。そのことを今回のミドゥラーシュによって検証してみたいと願っています。まずはアブラハムの召命の聖書箇所を読んでみたいと思います。

【新改訳改訂第 3 版】創世記 12 章 1~3 節

1 【主】はアブラムに仰せられた。

「あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。」

2 そうすれば、わたしはあなたを大いなる国民とし、あなたを祝福し、あなたの名を大いなるものとしよう。

あなたの名は祝福となる。

3 あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。

地上のすべての民族は、あなたによって祝福される。」

●今回のテキストの一つとなる創世記 12 章 1~3 節は、昨今、きわめて注目度の高いテキストとなっています。しかし多くの場合、その注目点が 2~3 節の「あなたの名は祝福となる。あなたを祝福する者をわたしは祝福し、あなたをのろう者をわたしはのろう。地上のすべての民族はあなたによって祝福される」という部分に偏っていて、なぜか 1 節の扱いが希薄であるように思います。私は、アブラムの召命の重要性はこの 1 節にあると考えます。つまり、「**あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。**」という主の命令です。そしてその命令に附随するかたちとして 2~3 節が置かれています。それゆえ、ここでは 1 節にのみフォーカスしたいと思います。

### 1. 「わたしが示す地」

#### (1) 創世記 12 章 1 節の重要性

- まずは、12 章 1 節のヘブル語原文の文法情報を整理しておきたいと思います。

【新改訳改訂第 3 版】創世記 12 章 1 節

【主】はアブラムに仰せられた。「**あなたは、あなたの生まれ故郷、あなたの父の家を出て、わたしが示す地へ行きなさい。**」

●原文の「レフ・レハー」(לְךָ-לְהָרָה)の「レフ」(לְךָ)は「行く」を意味する「ハーラフ」(לְהָרָה)の命令形(2 単男)です。「レハー」(לְהָרָה)は直訳すると「あなたに関しては」「あなたについては」となりますが、ここは「**あなた**」が強調されています。したがって、「レフ・レハー」で「あなたは行きなさい」、「あなたは旅立ちなさい」という意味です。そしてその旅立ちが、(1)「**どこから**」、(2)「**どこへ向かって**」旅立つのか語られています。

Gen 12:1

アヴラーム エル アドナイ ヴァヨ-メル

וַיֹּאמֶר יְהוָה אֶל-אַבְרָם

לְהָרָה לְךָ

מֵאֶרְצְךָ

וּמִמּוֹלַדְתְּךָ

וּמִבְּיַת אָבִיךָ

אֶל-הָאָרֶץ אֲשֶׁר אֲרָאֶךָ

レハー レフ  
メ-アルツエハー  
ウ-ミンモーラドゥテハー  
ア-ヴィーハー ウ-ミツベ-ト  
アルエッカー アシエル ハーア-レツ エル

- (1)「**どこから**」の「から」(from)を示すヘブル語の前置詞は「ミン」(מִן)ですが、省略されて「メ-」(מֵ)、あるいは「ミ」(מִ)で表されています。

- ①「あなたの地から」(「メ-アルツエハー」 מֵאֶרְצְךָ)
- ②「あなたの親族から」(「ミンモーラドゥテハー」 מִמּוֹלַדְתְּךָ)
- ③「あなたの父の家から」(「ミツベ-ト・ア-ヴィーハー」 מִבְּיַת אָבִיךָ)

です。①と②で「あなたの生まれ故郷を出て」と訳されます。ここは新改訳・新共同訳とも「二詞一意修辞法」で訳していますが、口語訳は「あなたは国を出て、親族に別れ、父の家を離れ、わたしが示す地へ行きなさい。」と訳しており、前置詞の「ミン」(מִן)を「出て」「別れ」「離れ」と内容によって訳し分けています。

●創世記 12 章 1 節において重要なことは、「どこから」「どこへ向かって」旅立つのかということです。後者の「どこへ」とは、主が「**わたしが示す地に向かつて**」(エル・ハーア-レツ・アシエル・アルエッカー)です。ところが、意外とこのことの重要性に気づかずにいることが多いのです。この「地」の着地点は、創世記 12 章では示されていません。「わたしが示す」の「示す」と訳された動詞は「ラーア-」(רָאָה)のヒフィル態の「示す、教える、啓示する」の 1 人称男単、2 人称接尾語です。主が示される地がどの地なのかは、アブラムが主のことばに従って旅立つことがなければ分からないのです。ですから、ヘブル人の手紙に「信仰によって、アブラムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました」(11:8)と記されているのです。

(2) 「わたしがあなたに示す地」とはどこなのか

- 「**わたしが示す地**」とは一体どこなのでしょう。原文では「わたしが**あなたに示す地**」となっております、

その「地」には冠詞がついています。つまり、いろいろな個々の場所ではなく、ある特定の地なのです。その特定の地とはカナン<sup>の</sup>地なんでしょうか。それとも狭義のある特定の地なんでしょうか。いずれにしても、その地は神のご計画においてきわめて重要な場所であるに違いありません。アブラハムはカナン<sup>の</sup>地に入り、さまざまな場所に滞在しながら、漂泊の旅を続けています。最初の滞在地はシェケムでした。そしてベテルとアイの間にある山へと進み、ネゲブ、エジプト、ヘブロン、ゲラル、ベエル・シェバにも滞在しています。彼の生涯ではヘブロンを中心に滞在していますが、そこからモリヤの地にある「ひとつの山」にも行っているのです。果たして、主の言われる「わたしが示す地」とはどこなのか、カナン<sup>の</sup>地全体を意味するとも、あるいは、エジプトの川からメソポタミヤのユーフラテス川までの全域とも(創世記 15:18)、あるいは、特定の地(モリヤの地にある山=サレム)とも考えられます。いずれにしても、アブラハムに対する神の召命にある「わたしが示す地」とは、「子孫の繁栄」「万民の祝福」「土地の賦与」の約束と密接に絡みつつ、漸次的に、螺旋的に展開しながら、やがてはメシア・イエシュアによって天と地がつながる「地」(御国)へと着地します。そのことをこれから検証してみたいと思います。

## 2. 「カルデア人の地ウル」からの旅立ち

- 1 節にあるように、なにゆえに、「あなたの生まれ故郷から」「あなたの父の家から出て」なのでしょう。

### (1) カルデア人のウルから出て



- 使徒の働き 7 章には「・・私たちの父アブラハムが、ハランに住む以前まだメソポタミヤにいたとき、栄光の神が彼に現れて、『あなたの土地とあなたの親族を離れ、わたしがあなたに示す地に行け』と言われました。そこで、アブラハムはカルデア人の地を出て、ハランに住みました。・・」(7:2~4)とあります。ここにある「カルデア人の地」という表現は、旧約聖書では「カルデア人のウル」でしばしば出てきます。

創 11:28 ハランはその父テラの存命中、彼の生まれ故郷であるカルデア人のウルで死んだ。

創 11:31 テラは、その息子アブラムと、ハランの子で自分の孫のロトと、息子のアブラムの妻である嫁のサライとを伴い、彼らはカナン<sup>の</sup>地に行くために、カルデア人のウルからいっしょに出かけた。しかし、彼らはハランまで来て、そこに住みついた。

創 15:7 また彼に仰せられた。「わたしは、この地をあなたの所有としてあなたに与えるために、カルデア人のウルからあなたを連れ出した【主】である。」

エレ 32:4 ユダの王ゼデキヤは、カルデア人の手からのがれることはできない。彼は必ずバビロンの王の手に渡され、彼と口と口で語り、目と目で、彼を見る。

- ここで注目してほしい点は、「カルデア人のウル」という表現は、ウルが「カルデア人」の支配にあるということです。エレミヤ書によれば、カルデア人とはバビロンの王のことであり、バビロンの王が支配する国と同義だということです。地上で最初の権力者となったニムロデはハムの子孫です。「彼の王国の初め

は・・みな、シヌアルの地にあった」(創世記 10:10)とありますが、「シヌアルの地」というのは今日のメソポタミア平原のことです。そこにはチグリス・ユーフラテスの二つの大河の下流域にある「肥沃の三日月地帯」と呼ばれる広大な平野で、アブラムが生まれたウルもそのメソポタミア平原にある古代都市の一つでした。この地はシュメールとかアッカドの地とも言い、「バビロン」の地名で呼ばれることもあるようです。「バビロン」はヘブル語の「バーヴェル」(בָּבֶל)で「混乱」を意味します。そこはハムの子孫たちが支配するところでした。創世記 10 章に登場する「最初の権力者」であった「ニムロデ」(נִמְרוֹד)の語源はヘブル語の「マーラド」(מָרָד)で、「反逆する」という意味です。何に反逆するのかと言えば、神に対して反逆するのです。その金字塔が「バベルの塔」でした。

【新改訳改訂第 3 版】創世記 11 章 2～9 節

- 2 そのころ、人々は東のほうから移動して来て、シヌアルの地に平地を見つけ、そこに定住した。
- 3 彼らは互いに言った。「さあ、れんがを作ってよく焼こう。」彼らは石の代わりにれんがを用い、粘土の代わりに瀝青を用いた。
- 4 そのうちに彼らは言うようになった。「さあ、われわれは町を建て、頂が天に届く塔を建て、名をあげよう。  
われわれが全地に散らされるといけないから。」
- 5 そのとき【主】は人間の建てた町と塔をご覧になるために降りて来られた。
- 6 【主】は仰せになった。「彼らがみな、一つの民、一つのことばで、このようなことをし始めたのなら、今や彼らにしようと思うことで、とどめられることはない。
- 7 さあ、降りて行って、そこでの彼らのことばを混乱させ、彼らが互いにことばが通じないようにしよう。」
- 8 こうして【主】は人々を、そこから地の全面に散らされたので、彼らはその町を建てるのをやめた。
- 9 それゆえ、その町の名はバベルと呼ばれた。【主】が全地のことばをそこで混乱させたから、すなわち、【主】が人々をそこから地の全面に散らしたからである。

●上記の箇所には、シヌアルの地に定住したハム系の人たちが塔を建てようとした意図が記されています。彼らの意図は「**われわれの名を上げる**」というものでした。「名を上げる」とは自分たちの力を誇示することであり、明らかに神に対する反逆を意味する行為でした。その行為の象徴が塔を建てることだったので。しかし、神が「ことばを混乱させ」たことで、彼らの思いが実現できないようにしたのです。それゆえ、その町の名は「バベル」(バビロン)と呼ばれました。

●自分たちの力によって他の町に住む者たちを略奪し、その支配を拡大して行くのがハム系の人々の特徴でした。そうした神に反逆する者たちの住む地から出るようにと、神がアブラムに命じたのが「あなたの生まれ故郷を出て」という召しの言葉です。使徒の働き 7 章 2～4 節には、「栄光の神がアブラハムに現われて、『あなたの土地とあなたの親族を離れ、わたしがあなたに示す地に行け。』と語られた」と記されていますが、創世記ではアブラムではなく、父のテラが息子アブラムや孫のロトを連れてウルを出たかのように記されています(11:31)。このことをどのように理解すべきでしょうか。

【新改訳改訂第 3 版】創世記 11 章 31 節

テラは、その息子アブラムと、ハランの子で自分の孫のロトと、息子のアブラムの妻である嫁のサライとを伴い、

彼らはカナンの地に行くために、カルデア人のウルからいっしょに出かけた。しかし、彼らはハランまで来て、そこに住みついた。

●上記に記されているアブラムの父テラについて、私たちはどのように理解すべきでしょうか。つまり、テラは何のために住み慣れたウルを出たのでしょうか。創世記 11 章 28 節に、「ハランはその父テラの存命中(原文は「面前で」)、彼の生まれ故郷であるカルデア人のウルで死んだ。」とあります。テラの三人の息子の一人ハランが、ウルで父の面前で死んだのです。ところが、死んだ理由が記されていません。ハランが死んだことと、父テラの一行がメソポタミヤの川を遡り、ハランという町に移動したことと関係があるのか、それとも関係がないのか。ユダヤのラビたちはこの点について、テラの一行がウルを去らなければならなかった理由についてのミドウラーシュを、ニムロデに關係する『ベレーシート・ラッパー』(パラシヤー38.13)の中で試みています。それによれば、以下の通りです。

●ニムロデのしもべたちは、偶像礼拝をしないアブラムを捕らえるとニムロデに引き渡した。ニムロデはアブラムに命じた。「火を崇拝せよ!」。するとアブラムは答えた。「わたしは水を崇拝します。火は水に消されるではありませんか。」ニムロデはまた命じた。「ならば水を崇拝せよ!」アブラムは答えた。「わたしは雲を崇拝します。水は雲によって運ばれるのではないですか。」ニムロデは命じた。「雲を崇拝せよ!」アブラムは答えた。「では、わたしは風を崇拝します。雲は風によって散らされるではありませんか」。ニムロデはなおも命じた。「風を崇拝せよ!」アブラムは答えた。「ならば人間を崇拝します。人間ならば風に耐えられましょう。」するとニムロデは言った。「おまえは同じ言葉を繰り返してばかりだ。見よ、炎を崇拝するこのわたしが、おまえを炎の中に投げ入れてくれるわ。おまえが神を崇拝しているのならば、神がおまえを炎の中から救い出し

てくれよう。」ところで、その場にはアブラムの弟ハランも同席していた。彼は思った。「わたしはどうすればいいのか? もしアブラムが勝利したならば、『わたしはアブラムのしもべです。』と言おう。もしニムロデが勝利したならば、『わたしはニムロデのしもべです』と言おう。」アブラムは燃えさかる炉の中に投げ入れられたが無事に救出された。するとニムロデはハランに聞いた。「おまえは誰のしもべか?」ハランは答えた。「わたしはアブラムのしもべです。」ニムロデのしもべたちはすぐさまハランを捕らえると炎の中に投げ入れた。彼が炎から出てきたときには腸までもが焼け焦げていた。彼は同席していた父テラの目の前で死んだ。

●それゆえ、『創世記』(11 章 28 節)には「ハランは父テラの面前で死んだ」(新共同訳)と訳されているのである。

●私はこのミドウラーシュがあながち嘘ではないように思えます。むしろ、本質を突いているのではないかと思います。なぜなら、バビロンでの死刑は火によるもの(焚殺)だからです。ダニエル書でも偶像礼拝をしなかった三人の有能なユダヤ人の青年たち(シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴ。ヘブル名はハナヌヤ、ミシャエル、アザルヤ)が捕えられ、縛られて、普通よりも七倍熱い火の中に投げ込まれたという話があります(3:19~23)。結果は、頭の毛も焦げず、上着も以前と変わらず、火のおいもしなかったとあります。この他にも、バビロンでの焚殺の話があります。それは捕囚の民たちの中に偽預言者がいて、早期解放の預言を語る不穏な動きを見せました。そのことを察知したバビロンの王ネブカデネザルは偽預言者を捕らえ、火で焼き殺したとあります。聖書にはその二人の名前(ゼデキヤとアハブ)が明記されています

(エレミヤ 29:22)。

●そもそも「ウル」はヘブル語で「ウール」(אור)と表記されますが、それは「燃える、火で燃やす」という意味です。そこを支配する王が「火の神を崇拝していた」ことを物語っています。そうした偶像礼拝のウルから、アブラハムの父であるテラが家族を連れて脱出し、カナン之地に行こうとしたことは大いにうなずけるのです。ところが、テラはその途上にある「ハラン」(死んだ息子の名と同じ名前の町)になぜか固執し、そこに住み着いてしまったのです。「住み着く」とは「定住する」ことを意味します。聖書ではウルから出たテラの一団には、アブラムの兄弟であるナホルの名は記されていませんが、おそらくテラに同行したか、後から遅れて同行したのではないかと推察します。なぜなら、やがてアブラハムが自分の息子イサクの嫁を見つけるために、かつて住んでいたハラン(=パダン・アラム)に、しもべたちの最年長者のエリエゼルを遣わしているからです。その時ハランにはアブラハムの兄弟ナホルの親族がいたのです。

## (2) 「あなたの父の家」を出て

●「あなたの父」とは「テラ」のことです。このテラについて、聖書は重要な情報を主のことばとして以下の箇所記しています。

【新改訳改訂第3版】ヨシュア記 24 章 1~2 節

- 1 ヨシュアはイスラエルの全部族をシェケムに集め、イスラエルの長老たち、そのかしらたち、さばきつかさたち、つかさたちを呼び寄せた。彼らが神の前に立ったとき、
- 2 ヨシュアはすべての民に言った。「イスラエルの神、【主】はこう仰せられる。『あなたがたの先祖たち、アブラハムの父で、ナホルの父でもあるテラは、昔、ユーフラテス川の向こうに住んでおり、ほかの神々に仕えていた。』

●ここでヨシュアが語ったテラについての情報は重要です。なぜ主がアブラムに対して「あなたの父の家を出て」と語らなければならなかったのか、その必然性をここに見るからです。「ほかの神々」がどんな神であるかは記されていませんが、**主なる神**でなかったことは確かです。つまり、テラは主なる神を知ってはいなかったということです。アブラムの父テラとの訣別は、アブラムが単に父から独り立ちするというレベルの話ではなく、偶像に仕えることから完全に訣別して、主である神を信じていく信仰の冒険へのチャレンジであったのです。ここに神の召命の厳しさがあります。

●この時点で、主の御名を知っていたのはアブラムだけであったということです(そこには妻のサライを、含めても良いと思われます)。何という超・マイノリティー(少数派)でしょうか。人は自分と同じくする者たちが多くいることで安心するものです。ところが、アブラムの場合、主の御名を知っている者が自分の周囲には皆無といっても良い状況です。自分を支えてくれるような、励ましてくれるような仲間はいない状況の中で、アブラムは見知らぬ地への信仰の旅を命じられたと言えます。イエシュアも弟子たちに、「**小さな群れよ。恐れることはない。あなたがたの父は、喜んであなたがたに御国をお与えになるからです。**」(【新改訳改訂第3版】ルカ 12:32)と言われました(「小さな群れ」という語彙はこの箇所のみ)。主



のご計画に参加する者たちは、このイエシュアのことばをしっかりと心に据えなければなりません。イエシュアがあえてそのように言われたのは、私たちがマイノリティーであることを恐れ、それを恥じることを見越しているからです。ですから、主を信じることは相当の覚悟が要ることなのです。主はそのことを承知の上で、アブラムという一人の人物に神の永遠のご計画を担わせられたのでした。私たちも、そうした重みをもって主が私たちを選び、召し出されたことを信じなければならないのです。

### (3) ヘブル人と呼ばれたアブラム

●創世記 14 章で、カナンに移り住んだアブラムが初めて「ヘブル人」と呼ばれています。なにゆえに、彼は「ヘブル人」と言われたのでしょうか。「ヘブル人」という語彙の初出箇所は創世記 14 章 13 節です。「ヘブル人」はヘブル語で「イヴリー」(עִבְרִי)と言い、その語源は動詞「アーヴァル」(אָוַר)から来ています。「アーヴァル」とは「(川を)渡る」という意味で、「ヘブル人」とは「川を渡ってきた者」という意味があるのです。確かにアブラムはハランで主のことばを聞いて、ユーフラテス川を渡って来た者です。また、それに加えて、バビロン(カルデア人)の支配から逃れ、偶像礼拝の文化と決別し、神の世界、御国の世界に渡って来た者という意味でもあるのです。

●「ヘブル人」とは、この世において、主にのみ信頼して歩む者を表わしているのです。異邦人である私たちは、この「ヘブル人」と言われたアブラムの信仰に接ぎ木された存在です。昨今、「ヘブル的視点から聖書を読み解く」ということが言われ始めていますが、本来の「ヘブル人」には、単に「川を越えて渡って来た者」という次元を越えた意味が隠されています。したがって単なるムーブメントとして受けとめてはいけません。人間中心の考え方から、神中心の考え方へ生き方を変えることを意味します。自分の心のサプリメントとして神のことばを摂取するのではなく、神には神ご自身がなさりたいご計画があるのだという視点から神を知り、神を求めていく生き方です。それは聖書の読み方を完全に変えてしまうことを意味しているのです。

●アブラム自身が自分を「ヘブル人」と称したのではなく、聖書が彼を「ヘブル人」と称しているのです。この事実はきわめて意味のあることです。つまり、ヘブル人であるアブラムにかかわるすべての事柄、人の名前も、地名も、すべて神の世界では意味を持つようになるからです。それは、名前や地名のヘブル語の中に神の概念が隠されているからです。聖書にはヘブル人と異邦人の区別しかないように、この世界には神を中心とする世界と、人を中心とする世界しかありません。アブラムが川を渡ったことは、人間中心の文化から神中心の文化へと渡って来たことを意味します。神を中心とした世界にあって、神に従うことによって初めて神のご計画を実現する者となり得るのです。彼の生涯はそのためのものであり、神のご計画の目的を実現させる信仰の旅(漂泊)を背負わされているのです。

### (4) アブラムが滞在した地名に隠されている意味

●アブラムは「カルデア人のウル」、「ハラン」の地を出て、カナン<sup>1</sup>の地に向かいました。カナン<sup>2</sup>の地でアブラムは以下のようにさまざまな場所を漂泊しています。「カナン」(「ケナアン」<sup>3</sup> קְנָעַן)の語源は「カーナ」(כַּנָּע)です。この語は「へりくだる」「征服される」という意味で、これは主にのろわれたカナンの宿命なのです。ハムの子孫であるカナンは、やがてはセムたちのしもべとなることがノアによって預言されているからです。それゆえカナンの地は、神の民にとっては約束の地であり、神はその地を「乳と蜜の流れる地」と呼ばれたのです。

●アブラムがカナンの地で滞在した地は以下の通りです。彼が滞在した地の地名にはそれぞれ隠されたメッセージがあります。しかもそれは主が示される最終の地がいかなる意味を持っているかを予表するメッセージでもあると考えます。これから滞在した地を一つひとつ取り上げてみたいと思います。

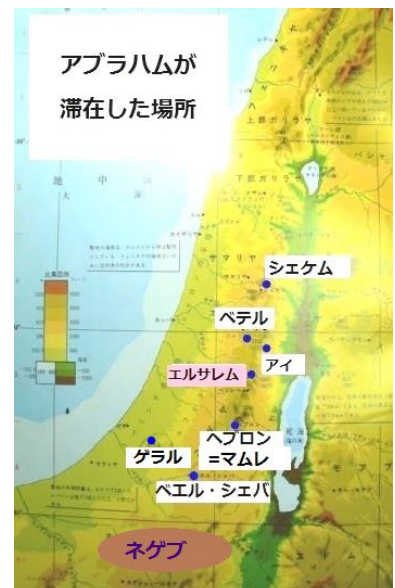
### ①「シェケム」(שֶׁכֶם)

●アブラムとその妻、そして甥のロトを連れてのカナンの地での最初の滞在地は「シェケム」(שֶׁכֶם)でした。ここは歴史的にきわめて重要な場所です。北はエバル山、南はゲリジム山、その谷間にあるのが「シェケム」(שֶׁכֶם)です。かつてヨシュアが全イスラエルの部族をここに集めて、これまで



の歴史を回顧したあとで、どの神に仕えるかを選択するように決断を促した場所です。ヨシュアが「私と私の家族とは主に仕える」という有名なことばを残したのも、この場所でした。「シェケム」という言葉は「肩」や「尾根」を意味します。申命記 11章29節に「あなたが、入って行って、所有しようとしている地に、あなたの神、【主】があなたを導き入れたなら、あなたはゲリジム山には祝福を、エバル山にはのろいを置かなければならない。」とあるように、シェケムは**選択を迫られる場所**だということです。

●また、アブラムは「シェケム」の「モレの榿の木」の下に宿営しています。「モレ」(מֹרֶה)は「モリヤ」(מֹרְיָה)と同様、その語幹は「教える」「示す」を意味する「ヤーラー」(יָרָה)の分詞で、カナンにおける神の顕現の場所を意味したのでないかと推測します。とすれば、信仰者にとっては、ある種の選択を迫られる場と言えます。アブラムの場合、シェケムで主が現れて、「あなたの子孫に、わたしはこの地を与える」と言われました。アブラムにとっても召命に対する信仰の決断と献身を、再度、迫られる場所だったのではないかと思います。そこで、アブラムは顕現された主のために、そこに祭壇を築いたと記されています(創世記12:7)。



●私たちにとっても、信仰や献身を再確認する霊的な「シェケム」が必要です。厳しくそのことを問いかける場が不可欠です。神に対する決断が現実の中で折れてしまわないように、それを厳しく呼び覚ましてくれるような「シェケム」に自ら身を置かなければなりません。そのことがあって初めて、次の滞在場所となる「ベテル」に移動することができるのです。



## ② 「ベテル」 (בֵּיתֵל) の東にある山

● 「ベテル」 (בֵּיתֵל) は、読んで字のごとく「神の家」という意味です。おそらくアブラムの時代では「ルズ」と呼ばれていたはずで、後にヤコブがハランに向かう際に、石を枕にして寝ていると、天と地を結ぶ梯子の夢を見ました。そして傍らには主がおられて語りかけたのです。ヤコブはここを「天の門」だと考え、「神の家」を意味する「ベテル」と名づけたのです。アブラムはベテルの東にある山に天幕を張り、そこでも祭壇を築いて、主に祈っています。

● 「神の家」を意味する「ベテル」の東にある「山」にアブラムは滞在しましたが、聖書において「山」とは神の支配、神の臨在を象徴します。この世の人間が築いた国を一瞬にして砕くメシアを表わす「一つの石」(ダニエル2:34)は、その後に他の山々よりも大きな山となることが預言されています。メシア王国(千年王国)において、「山」はメシアによる神の支配、神の臨在を象徴しています。

## ③ ネゲブ

● アブラムはさらに進んで、南の砂漠地帯である「ネゲブ」 (נֶגֶב) に旅をしています。砂漠は死と隣り合わせの危険な場所です。霊的な渇きも象徴するのではないかと考えます。詩篇42篇に「鹿が谷川の流れを慕いあえぐように、神よ。私のたましいはあなたを慕いあえぎます。」とあります。この渇きこそ神を求める者になくなくてはならないものです。渇きは霊的には危機を含んでいます。その渇きが神によって満たされることを選び取るか、それともこの世のものによって得ようとするかの選択の危機です。

## ④ エジプト

● アブラムはネゲブで飢饉を経験し、エジプトに一時逃れています。アブラムの信仰の旅はこの点で失敗をします。彼は食糧を求めてエジプトへ行きました。**エジプトは「この世」の象徴**です。確かに、アブラムはそこで予想を超えた多くの富を得ますが、同時に、主の召命に応えることがすでに自分では出来なくなる状況に陥ってしまったのです。信仰の旅路において、この世の力を軽く考えてはなりません。「すべての世にあるもの、すなわち、肉の欲、目の欲、暮らし向きの自慢などは、御父から出たものではなく、この世から出たもの」(1ヨハネ2:16)だとしています。世を愛する者になってはなりません。エジプトのことをヘブル語では「ミツライム」 (מִצְרַיִם) と表記します。「ミツライム」の語源は「ツァーラル」 (צָרַר) で「敵視する」という意味です。エジプトはハムの子孫であり、聖書の主なる神に対して常に「敵視する」国なのです。神のご計画ではそうした神に敵対する国々は、鉄の杖を与えられた御子メシアによってことごとく打ち砕かれます(詩篇2:9)。そのようにして神は、光とやみとを最終的に「区別する」のです(創世記1:4)。

## ⑤ 「ヘbron」

● エジプトから神によって助け出されたことはただただ神のあわれみです。私たちが「世」に支配されるならば、自分の力でなかなか抜け出すことができません。アブラムの召命は、神のあわれみによって、もう一

度、最初の時点に戻されます。そしてかつて祭壇を築いたベテルにまで帰り、その後、ヘブロン(הַבְּרֹנָה)に滞在しています。「ヘブロン」(הַבְּרֹנָה)は「**交わり**」を象徴しています。語源は「ハーヴァル」(הַבְּרֹנָה)で、「一つになる、同盟を結ぶ」という意味です。事実、アブラムは周囲の人々と盟約を結んでいます(創世記 14:13)。

●また、「ハーヴァル」には他の意味もあります。幕屋は十枚の幕で造りますが、五枚ずつの幕を互いにつながわせて造らなければなりません。その「つなが合わせる」という動詞に「ハーヴァル」(הַבְּרֹנָה)が使われているのです。このことはやがてユダヤ人と異邦人がキリストにあってしっかりとつながり合わされることで、ともに建てられ、神の御住まいとなることを啓示するものです。その啓示を初めて理解したのは使徒パウロでした。パウロはこの真理に目が開かれて、エペソ人への手紙の中でこの真理を各章で展開しています。私たちもこの真理に目が開かれる必要があります。「ヘブロン」は「**主にある交わり**」を啓示しているのです。ちなみに、詩篇122篇3節に「エルサレム、それは、よくまとめられた町として建てられている。」とあります。「まとめられた」とは「結び合わされた」という「ハーヴァル」(הַבְּרֹנָה)の強意形の受動態が使われており、預言的完了形で記されています。「預言的完了形」とは、「終わりの日」に、必ず、そうなることを表しています。

#### ⑥ ゲラル とベエル・シェバ

●アブラハムはペリシテ領にも滞在しています。そこにはアピメレクという王がいました。「ゲラル」(גְּרָל)は「反芻する」という意味の「ガーラル」(גְּרָל)に由来します。イスラエルの時代になると、ペリシテ人はイスラエルの民に対して執拗なほどに暴虐を繰り返します。ですから、このような性格をもったペリシテ人(彼らもハムの子孫)とかかわるためには、柔和さと忍耐が必要です。アブラハムもイサクもこのアピメレクに対して柔和の限りを尽くしています。嫌がらせに遭い、当然の権利を主張できる時にもその権利を主張しないこと、報復しないこと、それが聖書の意味する「柔和さ」です。その柔和さによって、相手に主を恐れさせ、互いの間に平和の約束を交わすようにしています。その象徴が「ベエル・シェバ」(בְּאֵר־שֶׁבַע)なのです。言い換えるなら、「ベエル・シェバ」は「**信仰のあかしと平和の絆の象徴**」と言えます。これは霊的な「ヘブロン」に住んだ者でなければ得られない祝福です。事実、アブラハムも息子のイサクも、自分のためには決して報復的な争いをしていません。それが相手の執拗な暴虐を止め、相手の態度を変えさせているのです。

#### ⑦ モリヤの地のひとつの山—「イエル—シャーライム」

●このことについては、次の最終の項で取り上げます。

### 3. 「わたしが示す地」の永遠の目的地

●「レフ・レハー」が記されているもう一箇所の聖書箇所 22 章 2 節を原文で見たいと思います。

Gen 22:2

アーハヴター アシエル イェヒドゥハー エット ビヌハー エット ナー カハ ヴァヨームル

וַיֹּאמֶר קַח-נָא אֶת-בְּנֶךָ אֶת-יְחִידְךָ אֲשֶׁר-אַהַבְתָּ  
 あなたの愛する あなたのひとり子を あなたの息子を さあ連れて行け 神は仰せられた

ヴェハアレーフー ハンモーリッヤー エレツ エル レハー ヴェレフ イツハーク エット

אֶת-יִצְחָק וְלֶךְ-לְךָ אֶל-אֶרֶץ הַמּוֹרִיָּה וְהַעֲלֵהוּ  
 そしてささげなさい モリヤの 地 に あなたは 行きなさい イサク を

エーレーハー オーマル アシエル ヘハーリーム アハド アル レオーラー シャーム

שָׁם לְעֹלָה עַל אֶחָד הַהָרִים אֲשֶׁר אָמַר אֱלֹהִים  
 あなたに 私が命じる ~ところの 山々の ひとつ の上で 全焼のいけにえとして そこで

●主はアブラハムに「(あなたは)モリヤの地に行きなさい」と命じます。「モリヤ」(מוֹרִיָּה)とは「主が示す」という意味です。「ヤー」(יָה)は「主」で、「モーリー」(מוֹרִי)は「教え、示す」を意味する「ヤーラー」(יָרָה)が分詞化したものです。つまり、「モリヤの地」とは「主が啓示する地」という意味です。その地にある一つの山で、あなたの愛するひとり子イサクを全焼のいけにえとしてささげなさいと、主はアブラハムに命じられたのです。これはアブラハムの生涯における最大の信仰の試練(テスト)でしたが、同時に、神のご計画のきわめて重要な事柄が啓示される場へと神はアブラハムを導かれたのでした。

●「一つの山」とは、「エルサレム」(「イェルーシャーライム」יְרוּשָׁלַיִם)のことです。アブラハムはその場所を「アドナイ・イルエ」(יְהוָה יְרֵאֵה)と名づけています。なぜなら、そこは主が特別に注視されている場所だったからです。アブラハムの漂泊の旅の最終目的地は、まさにモリヤの地の一つの山である「エルサレム」(イェルーシャーライム)だったのです。そのことをアブラハムは信仰によって悟りました。その場所こそ神と人とがともに住むことになる永遠の揺らぐことのない御国の中心であり、確かな土台のある永遠の都の中心となるべき「エデンの園」です。

Gen 22:14

イルエ アドナイ ハワー ハンマーコーム シェーム アブラーハーム ヴァウイクラー

וַיִּקְרָא אַבְרָהָם שֵׁם-הַמָּקוֹם הַהוּא יְהוָה יְרֵאֵה  
 イルエ アドナイ その 場所の 名を アブラハムは そして~と呼んだ

イェラーエ アドナイ ベハル ハッヨーム イェアーメール アシエル

אֲשֶׁר יֹאמַר הַיּוֹם בְּהַר יְהוָה יְרֵאֵה  
 主は見られる 主の 山には 今日 言われている ように

(主)の備えがある

(主)のヴィジョンがある

●ユダヤ人の哲学者であり、ラビの一人でもあったアブラハム・ヨシュア・ヘシエルは「アドナイ・イルエ」の「イルエ」を「ヴィジョン」と解釈しました。なぜなら、そこは「主がご覧になった」という意味だからです。したがって、「主の山には備えがある」(新改訳)の直訳は、「主の山において主がご覧になる」です。

そして主がご覧になっているものをアブラハムは知り、彼も同じく見たのです。このことが聖書の意味する「愛する」(「アーハヴ」 אָהַב)ということです。そもそも聖書で初めて「愛する」という言葉が登場するのは創世記22章2節です。「あなたの愛しているひとり子イサクを連れて」とあります。アブラハムの信仰の試練は、「愛する」ということがどういふことが試されたようにも見受けられます。イサクが父アブラハムに従順に従ったように、「神がご覧になっているヴィジョンを知って、私たちもそれを見、それに従い、参与すること」が、聖書のいう「愛する」ことだと言えるのです。つまり、「主の山には備えがある」と訳されている箇所の意味は、「神に従うならすべての必要が備えられる」という意味ではなく、「主の山(エルサレム)にはヴィジョンがある」と理解できるのです。「イエルーシャーライム」の語彙に含まれる「シャーレーム」(שָׁלוֹם)には「完成する」という意味があります。まさにエルサレムは、神のヴィジョンが夢や幻で終わるのではなく、「**神のヴィジョンが完成するところ**」なのです。つまり、「エルサレム」は神と人とがともに住むという神のご計画のヴィジョンが完成する御国(エデンの園)の中心地なのです。

●聖書では「山」は主ご自身の臨在、あるいは、主の支配する国を象徴します。ですから、「終わりの日」に成就するメシア王国において、「主の家の山は、山々の頂に堅く立ち、丘々よりもそびえ立ち、すべての国々がそこに流れて来る。」(イザヤ2:2)のです。アブラハムはその主の山こそ、自分の漂泊の終着地点だと信仰的に悟ったのです。

【新改訳改訂第3版】ヘブル人への手紙11章8～10節

- 8 信仰によって、アブラハムは、相続財産として受け取るべき地に出て行けとの召しを受けたとき、これに従い、どこに行くのかを知らないで、出て行きました。
- 9 信仰によって、彼は約束された地に他国人のようにして住み、同じ約束とともに相続するイサクやヤコブとともに天幕生活をしました。
- 10 彼は、堅い基礎の上に建てられた都を待ち望んでいたからです。その都を設計し建設されたのは神です。

## ヘアハリート

●アブラハムの信仰による漂泊の旅は、主が常にご覧になっているモリヤの地の一つの山を見させられる旅でした。そこは神のご計画が完成されるところです。そこを目指す漂泊の旅をするようにと主はアブラハムを召されたと言えるのです。それが、創世記12章1節の「**わたしが(あなたに)示す地へ行け**」という「レフ・レハー」(לֵךְ-לְהָאָרֶץ)が意味することです。信仰の父アブラハムが神のご覧になっていた神と人とがともに住む都、堅い基礎の上に建てられた永遠の都(=新しいエルサレム)を信仰によって見たのだとすれば、私たちもアブラハムと同様にその都を待ち望みつつ、与えられた信仰の旅を全うしなければならぬのです。「揺り動かされない御国を受け」るように、選び、召された私たちは、そのことをたえず感謝しながら、たえず寄り添ってくださる「知恵と啓示の御霊」の助けによって、日々「天に宝を積む」歩みをして行けるようにと祈ります。

2017.6.26

ヘブル・ミドゥラーシュ例会 No.12

空知太栄光キリスト教会牧師 銘形 秀則